

4) 水田内へのNaPCP撒布はその周囲のミヤイリガイ処理と併行して行われなければならない。

5) 水田の畦畔部のミヤイリガイの処理に留意すべきである。

6) 効果の判定は直接死亡率を検すると共にミヤイリガイ個体群密度の推移も併せ検しなければならない。

## 文 献

1. McMullen, D. B. (1949): A plate method of screening chemicals as molluscicides, *J. of Parasit.*, 35, 28.

2. McMullen, D. B., Komiyama, S., Ishii, N., E. ndo-Itadashi, T. & Mitoma, Y. (1951): Results obtained in testing molluscicides in field plots containing *Oncomelania nosophora*, an intermediate host of *Schistosoma japonicum*, *Amer. J. of Trop. Med.*, 31 (5), 583-592.

3. Hunter, G. W. III., Ritchie, L. S., Freytag, R. E., Pan, C., Potts, D. E. & Yokogawa, M. (1951): "Operation Santobrite" a schistosome snail eradication program in Japan, *J. of Parasit.*, 37, 31-32.

4. Hunter, G. w. III., Freytag, R. E., Ritchie, L. S., Yokogawa, M. & Potts, D. E. (1952): Studies on schistosomiasis. VI. Control of the snail host in schistosomiasis in Japan with Sodium pentachlorophenate, *Amer. J. of Trop. Med. & Hyg.*, 1 (5), 831-847.

5. 岡部浩洋, 渋谷浩 (1952): 宮入員のPCP-Naの殺貝効果 (日本住血吸虫病の予防に関する研究Ⅲ), 久留米医学会雑誌, 15 (7-8), 436-441.

6. 飯島利彦, 秋山澄雄, 佐々木孝, 山本祐康 (1954): PCP-Naの宮入員殺貝効果の検討, 寄生虫学雑誌, 3(4), 278, 7 (4), 18-21.

7. 山梨県農業試験場 (1959): PCPによる殺貝と水稻の関連試験成績書, パンフレット.

8. 保阪幸男 (1959): ミヤイリガイ殺貝剤の実験室内効果判定法の検討 (I), 寄生虫学雑誌8 (1), 102-107.

9. 飯島利彦, 杉浦三郎 (1961): ミヤイリガイの温度に対する抵抗性について, 寄生虫学雑誌, 10 (5), 582-586.

10. 小宮義孝, 小島邦子 (1959): 土中に埋没されたミヤイリガイ *Oncomelania nosophora* の移動及び死滅状況について, 寄生虫学雑誌, 8 (1), 96-101.

## 4. 山梨県産ミヤイリガイと静岡県富士川町産及び福岡県長門石産ミヤイリガイの殻型との比較

飯 島 利 彦

### 序 説

棲息地を異にするミヤイリガイの殻型は、相互に若干の相異のあることは既に多数の報告があり、就中、福田 (1938) は日本産ミヤイリガイを関東、中国、九州の3地方型に分類し、小林ら (1951) は短大、細長の2型に、菊地 (1951) は山梨県産のそれを細長、太短の2型に夫々分類している。

しかるに、1961年5月著者らの調査の結果、富士川河口に当る静岡県富士川町地内に相当多数のミヤイリガイが発見せられたが、これらと山梨県産のそれとは外観上若干の差異のあるように見受けられたので、これらと福岡県長門石産のその殻型の比較を試みた。

### 方 法

計測に用いたミヤイリガイは、山梨県中巨摩郡竜王町及び白根町で採取したもの99コ、静岡県庵原郡富士川町岩淵駅南のもの69コ及び福岡県久留米市長門石地内で採取したもの75コである。これにより各棲息地の分布型を推測するに、何れも正規型分布をなすものと認められた。

計測は個々のミヤイリガイに対し0.01mmマイクロメーターで夫々殻長及び殻径を計測し且殻径/殻長比を算出した。

### 成績及び考按

測定結果は表示せる如くであるが、山梨県産ミヤイリガイの平均殻長は $7.66 \pm 0.09$ mm (信頼限界95%, 以下同じ)、殻径は $2.77 \pm 0.04$ mmで殻径/殻長の平均は0.361

表： 各地産ミヤイリガイの計測値

採 集 地 名	計測 貝数	殻 (mm)長	殻 (mm)径	殻径/殻長比
山梨県中巨摩郡八田村・白根町	99	7.66±0.09	2.77±0.04	0.361±0.009
静岡県庵原郡富士川町	69	7.28±0.14	2.51±0.01	0.345±0.007
福岡県久留米市長門石	75	7.33±0.26	2.67±0.06	0.366±0.003

(信頼限界 95%)

±0.009となる。静岡県産ミヤイリガイの平均殻長及び平均殻径は夫々7.28±0.14mm及び2.51±0.01mm, 殻径/殻長比は0.345±0.007であった。又福岡県産のミヤイリガイの平均殻長及び平均殻径は夫々7.33±0.26mm及び2.67±0.06mm, 殻径の殻長に対する比率は0.366±0.003となる。

これら各地のミヤイリガイの殻径/殻長比を比較するに、山梨県産及び福岡県産のミヤイリガイ相互の間には有意差は認められない。即ち両者は同で類型に属するもののようである。これに対し山梨県産あるいは福岡県産のミヤイリガイと静岡県産のそれとの間にはあきらかに(5%以下の危険率で)有意の差が認められる。即ち山梨県あるいは福岡県産のミヤイリガイのいわゆる「太短型」であるに対し静岡県産のそれはいわゆる「細長型」である。

Halawaniら(1958)はEgyptにおける*Schistosoma mansoni*の中間宿主 *Biomphalaria alexandrina*が、その棲息地の異なるにつれ、形態学的に相異が認められることを報じ、小林ら(1951)は山梨県産ミヤイリガイは短太型に属し、静岡県沼津市近郊のカイは細長型に属する等ミヤイリガイも又その棲息地の異なるにつれ、その型態も自ら相違がみられると述べている。

かかる観点に立つて本計測の結果をみるに、静岡県富士川町のミヤイリガイは同県沼津市近郊のミヤイリガイとは外形的に同一類型に属し、山梨県産のそれとは類型を異にする。したがって、静岡県富士川町産のミヤイリガイの起原は遠く年代をさかのぼつた場合は別として、

相当古くから同地に固着していたものごとく類推れさる。しかしかかる問題の解明は一事象に拠つてのみこれを行うことは極めて危険なことであり、推測そのものに幾多の困難性を包蔵していることはもちろんである。従つてここでは同地は山梨県のミヤイリガイ棲息地を貫流して南下する富士川の河口にありながら、そこに棲息するミヤイリガイそのものは外形的には、その上流地域である山梨県に棲息するミヤイリガイと相当大きな差異が認められることを指摘するにとどめたい。

#### 要 約

静岡県富士川町産ミヤイリガイはいわゆる「細長型」で典型的には同県沼津市近郊のそれに属し、山梨県産のそれに相異なる。

#### 文 献

- 1) 福田真杉(1938): 日本産カタヤマガイの分類, ヴイナス, 8 (3-4), 147-153.
- 2) 小林晴治郎, 川本脩二(1951): 宮入貝の習性研究(第3報), 寄生虫学会記事, 26, 32-33.
- 3) 菊地滋(1951): 山梨県の宮入貝に就て, 寄生虫学会記事, 26, 29-30.
- 4) Halawani, A., El Raii, F. & Sadek, G. (1958): On the morphology and nomenclature of *Biomphalaria alexandrina* (Ehrenberg, 1831) versus *B. boissyi* (Potiez and Michaud, 1838)., J. Egyptian Med. Assn., 1-5.

## 5. 日本住血吸虫病のアンチモン剤による治療の再検討

大 田 秀 浄

### I 緒 言

1918年Mc Donaph及びChristophersonが埃及住血吸虫病に吐酒石が治療効果のあることを発見してより、宮川、西によりKをNaに置換したStibnai(ナトリウム

吐酒石)が日本住血吸虫(以下日住と省略)病に毒性少く、治療効果のあることを認めた。Stibnai以外に3価, 5価のアンチモン製剤があるが、一般にはStibnaiが本病治療薬剤として使用されている。しかしStidnaiの0.4cc/